新剣豪伝

中山義秀

新剣豪伝

中山義秀

六興出版

A44564

新剣豪伝

昭和五十七年八月十九日　第一刷

著者　中山義秀

発行者　賀來壽一

発行所　株式会社　六興出版

東京都文京区水道二ノ九ノ二
電話東京(943)三四三一(代表)
振替　東京　一ノ九二四四八番

印刷　図書印刷
製本
表紙　半七写真

©1982 Himeko Nakayama

0093-07089-9216
Printed in Japan

新剣豪伝／目次

諸岡一羽の三人の弟子 7
土子泥之助 24
根岸菟角 39
伊藤一刀斎 60
活人剣 68
寒夜の霜 79
風薫る 96
小野治郎右衛門忠明 113
林崎甚助重信 155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

富田勢源　206
斎藤節翁　215
山岡鉄舟　224

解題　後藤杜三

装画　佐多芳郎

新剣豪伝

諸岡一羽の三人の弟子

一

秋の夜明けである。

河面に白くたちこめた朝霧が、微風にあふられて次第にうすらいでゆく。その下から枯れかけた葦原が、河岸一帯に姿をあらわしてくる。

陽はまだ昇らない。葦の間にひたひたとよせている河水は、磨かれた鉄のようにつめたく澄んでいる。

河岸につッ立って腕ぐみしながら、東の方をじっと見つめている男がある。古布子の腰に手拭をぶらさげているのは、顔洗いに出てきたものであろう。

頭はざんばらの散らし髪で、背の高さは六尺ちかくある。両肩を盛上げるようにいからせている身体つきは、このあたりの農民や漁夫の恰好ではない。

朝風に吹かれながら袷一枚で寒そうにもなく、いつまでもじっとして動かないのは、やがて彼方に昇る太陽を待っているのでもあろうか。

手桶をさげて河岸から出てきた男が、後から彼に声をかけた。

「菟角、何をぼんやり眺めている」

相手は後をふりかえって、

「泥之助、あれを見ろ。鹿がいっぱい群がって、水を飲んでいる」

「どれどれ、どっちの方角だ」

「あそこよ。こっちから斜めの向う岸だ」

此処は霞ヶ浦にちかい、常陸の江戸崎。前を小野川が流れている。小野川は中央がくびれて上流と下流とが瓢箪型に膨らんでいる。

上流の方の河幅が大きくて、向う岸がしかと見定められないくらいに広い。川というよりは、小さな湖だ。

対岸は潮来、鹿島につづく、平地の田野であ

る。香取とならんで、我が国武術の祖神とあおがれる鹿島神宮は、江戸崎のちょうどま東の方向にある。

菟角とよばれた男が、じっと見つめていたのは、まさしくその方角だ。泥之助は手桶を地におろすと、まず鹿島の方にむかって、うやうやしく頭をたれ、二つ三つ拍手をならしながら黙禱をささげた後、おもむろに菟角のしめす水面の彼方をのぞんだ。

南よりの遠い向う岸で、白い靄の中に農家の屋根や森の木立らしいものが、黒くちょっぴりと見えるばかり、鹿の影など何処にも見あたらない。

「菟角、何も居やせんではないか」

菟角は角のある眼を、ぎろりと光らせながら、あざ笑うように、

「泥之助、貴様は兵法者に似あわず、心得のにぶいやつだな」

「黙れ、菟角。眼力は貴様よりたしかだ。何と云われようと、見えないものは見えぬわ」

「そこが、貴様の鈍さよ。あの靄の動くのが、わからぬか」

「風におされて、流れるのであろう」

「風なれば、横になびく。あれは、上下にも動くぞ」

「それが、どうしたというのだ」

「つまり、あれは靄ではなくて、鹿共の息じゃ。河辺につどうて水を飲んでは、空に仰向いて息を吐く。その息が空にたなびき、あのように濃くなったり薄くなったりするのじゃ」

「なるほど」

泥之助は正直に、なかば信じかけたが、すぐ首をひねって、

「しかし、少しおかしいな。鹿でなくて、牛馬だったらどうする」

「牛馬なぞで、あるわけがない。吐く息が靄のように棚びくのは、数十百頭の鹿が群がっているからだ。おそらく鹿島の神鹿が野良に餌さをもとめて、あのあたりまでやって来たものに相違あるまい。今から追いかけて行き、弓矢で射

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

てとろうかと考えていたところだ。久しく鹿の美肉にも、ありつかぬからな」
「飛んでもないことだ。神鹿を射殺せば、無事にはすむまいぞ」
「鹿島をはなれた鹿ならば、野鹿も同様、誰にも文句は云わせぬ」
「貴様は今日、師匠のお薬を買いに、府中へ行く番にあたっている。鹿を追廻している暇などない筈だ」
府中は今の石岡だが、当時の繁昌地で、江戸崎から霞ヶ浦通いの舟便があった。
「師匠の御病気は、薬をいくら飲んでも、一向快くはならない。鹿の肉でもすすめたほうが、かえってお身体によいかもしれぬて」
「たわけたことを申すな。あの御病気には、獣肉は何より毒じゃ。菟角、この膿血を見るがいい」
泥之助のさげてきた手桶の中には、師匠の汚れ物がいっぱい詰っていた。彼はそれを河中へ投げこむと、川端にしゃがんで人目はばかるように、急いで洗いにかかった。
「菟角、貴様も手伝え」
「おう」
彼はそう答えたものの、こういう汚い仕事には、すっかり飽きあきしている風である。
彼等の刀術の師匠、諸岡一羽斎が発病してから、はや一年あまりになる。
病気は、人の忌み嫌う癩だ。膚肉がくずれて膿血をふきだし、たちいが自由にならないまま、一間にとじこもったきりでいる。
諸岡は江戸崎の郷士で、この頃の名人だった。下総香取郡の人、飯篠長威斎のおこした天真正伝の流儀をつたえて、長威斎の再来とうたわれていたほどである。二人の間は時代の上で、百年余の隔りがある。
鹿島、香取の武神をもつ関東は、武術の本場である。一口に下り兵法、上り音曲と云われているくらいだ。兵法は関東がよく、音曲は上方がいいという意味である。
鹿島の神主七人から、関東七流が生れ、これ

を兵法の古流とよんでいる。
足利の季世から禅とむすんで、剣道は各流派がおこった。古流は槍、三尺から五尺余の長刀を主とする、刺撃の術である。
新興の流派の中では、小田流、中条流、長威斎の天真正伝の神道流、松本備前守の鹿島神流が名高い。上泉秀綱の神陰流、塚原卜伝の新当流などがこれにつづく。
いずれも関東の兵法である。諸岡一羽斎はこうした本場の名人で、弟子も多勢あったが、病気のため四散してしまった。
僅に印可をうけた、秘蔵の弟子三人が残っている。根岸菟角、土子泥之助、岩間小熊達だ。
彼等は師恩にむくいるために、木刀を握った手で米をかしぎ、水をくみ、山から薪をあつめて、まめまめしく師の看護にあたっている。また生活のかせぎに、竹木の細工をしたり、霞ヶ関へ漁に出たり、耕作の鋤鍬をとったりもする。
彼等はまだ二十代の若者達だが、すでに師の印可をうけ、武芸の師範となる立派な資格をもっていた。何処へ行っても、決して他にひけをとらぬ、斯道の達人である。
しかし、剣の上では技術のほかに、心法をむずかしくいうから、薪水の労をとる賤役も、すべて修業と心得て、忠実にはたらいている。
ただ根岸菟角ばかりは、内々厭気がさしていた。長身の彼は臂力(ひりき)がつよい上に、小才が利く。
癩病の師につかえて、江戸崎あたりの草深い田舎に、いつまでもくすぶっているのが、馬鹿らしくてならない。腕ができたからは一日も早く、然るべき土地へおしだして行って、一身の出世を計りたいと思っている。
彼からみると相弟子の泥之助や小熊は、愚直で融通がきかなかった。他に人がないように、諸岡を唯一の師とあがめている。その師のためには、若い生涯を葬ることをいとわない。風雲の志を、持たないもののようである。
師匠の汚れ物をすすぎ終った頃、まむかいから陽がのぼった。河の面はいちめん、きらめく金波に赫と照りはえる。

狭霧はあとかたもなく消えうせ、水も野も燃えたつ金色の世界。水郷の秋は、明るくて美しい。吹く風にも、さわやかな季節のかおりがある。

「今日も、好い日和だ。師匠の御塩梅は、どうかな」

泥之助は洗い物を腕にかけ、手桶に新しく水をくんで、菟角と家にかえった。

炊事がかりの岩間小熊は、諸岡に朝食をすすめた後、二人の帰りをまちながら、師匠の肩をなでさすっている。

諸岡は藁蒲団の上にすわり、火桶箱の上にかごんでうつむいていた。四十歳をいくらも越えていないのに、頭髪はまばらに脱けおちて地肌が赤くあらわれ、頬の肉はぶよぶよにたるんで皺ばみ、まるで六十すぎの老人のように見える。

両眼は病毒におかされて、盲えていた。そのむざんな有様は、これが名人の姿かと怪しまれるばかりである。

「お早うございます。御機嫌はいかがであられますか」

泥之助と菟角は、部屋の閾際に両手をついて、師匠に挨拶した。諸岡はうなずくばかりで、何も云わない。

「菟角はこれより、府中へまいりますが、何か御用はございませぬか」

小熊が肩をしずかに揉みながら、菟角にかわって師匠の背後からきいた。

「何しに、まいるのじゃ」

一羽斎はつぶれたような、細い声をだした。

「お師匠様のお薬を、もとめに参ります」

諸岡はしばらく無言でいたが、やがて片手で納戸のほうを指さし、

「小熊、あれより脇差をもてまいれ」

「脇差を、何となされます」

「菟角につかわして売払わせ、薬餌のしろにあてたがよい」

「いや、その御懸念には、およびませぬ。まだ薬代は、多分に仕度してございます」

こんどは泥之助が、とっさにそう答えた。菟

角は頭をさげたまま、ずうっと黙っている。
諸岡は見えぬ眼から、涙を落して、
「みなみなに、いかいお世話をかける喃」
「飛んでもなき仰せ、御本復が何よりの大事と存じます」
諸岡には、妻子がなかった。はやくから病気を覚悟していたものか、江戸崎を遠く離れたこともない。名声は高かったが、彼一代で家系を断絶させた、孤独な剣客である。
菟角は諸岡が懐紙をとりだして、洟をうちかむ姿をみると、座をすべって、
「ではこれより、府中へ行ってまいります」
「御苦労さまじゃ。道中、気をつけたがよい」
「有難うございます」
その時、座の空気をひきたてるように、泥之助が笑って、
「菟角の道中ならば、往来の者のほうが気をつけましょう」
一羽斎はそれに誘われ、
「はゝゝゝゝ、なる程な」
泣くにつけ笑うにつけ、彼には弟子達の真情やその逞しさが、嬉しくてならないようである。

二

根岸菟角はそれなり、江戸崎へもどって来なかった。
彼の持物を調べてみると、着替えの衣服その他がなくなっている。いつの間にか、外へ持ちだしてしまったものらしい。
「うぬ、病気のお師匠を見すてて、逐電しおったな」
小熊がこぶしを握って激昂すると、泥之助も、
「そう云えば、あの朝の様子が訝しかった。鹿だなぞと俺をだまして、胡麻化しおったが、そうと気づけば、一刀両断にしてくれンずものを」
「何処へ遁げおったか、二人で手分けして後追うてももう間にあうまい」
「彼奴は他国者故、西国へ走ったかもしれぬわ」

「お師匠さまさえ、御病気でなくば……」
小熊は髭もじゃの顔の中から、両眼を光らせ、
「草の根を分けても、捜しださずにはおかぬ」
「我とても同じ心だが、さしあたってお師匠へ、どう申上げたものであろうなア、さぞかし、お気おとしなさることであろう」
「いや、とうにもう、気づいていられるに違いない。我等の手前、黙っておられるばかりじゃ」
「では、わざと何も申上げずにおくか。そのかわり菟角めの分まで、お介抱申上げることにいたそう」
「それがいい、それが上策だ、だが、泥之助」
「なんだ、小熊」
「いつかは菟角奴に、天誅を加えてやるぞ」
「云うにやおよぶ。彼奴めを打殺して屍を路頭にさらし、世上に恥を与えてやらずにおかぬわい」
しかし、彼等はその時期がくるまで、なお数年間待たなければならなかった。

諸岡一羽斎は二人の弟子の看護をうけながら、文禄二年（西紀一五九三）の初秋に亡くなった。菟角の出奔以来、満四年後にあたる。
その間関東の形勢に、大きな変動があった。それまで常陸の佐竹をのぞく、関東の諸州を支配していた北条氏がほろび、かわって徳川家康が江戸へ入部してきたからである。
それと一緒に、小田原の繁昌は江戸へうつり、北条家の遺臣も町民も、みな江戸へ集ってくる。その中に、根岸菟角がいた。
江戸崎を遁げだした菟角は、総髪の頭に鳥の羽根を表一杯につづった袖無し羽織をきて、鉄（てつ）疣（ゆう）のある六角棒をつきながら小田原へやってきた。
小田原役のおこる、前年の秋である。
小田原は北条氏五代の城下で、堺の港とならぶその繁華ぶりは、天下に聞えている。
それで望をもつ諸国の人々が、此処へあつまってくる。一刀流の開祖伊藤景久なども、小田原をたずねて、北条家の侍に流儀をのこしてい

った。

根岸菟角も、その一人である。彼が山伏とも天狗ともつかぬ、異様な扮装でのりこんできたのは、衆目をひくための広告手段だ。

上背が六尺近くあるうえに、眼の角だったもの凄い顔つきなので、一層効果がある。

菟角の出現は、たちまち城下の評判となり、彼が街の辻々や寺院の境内にあらわれると、人人が多勢集ってきて、彼は何者だときく。

「我こそは愛宕山の天狗、太郎坊から極意をうけて、微塵流の一派をたてた兵法者だ」

と答え、六角棒をりゅうりゅうと振廻してみせると、群衆は感歎した。

戦国の末で、人々が武張ったことを喜んだ時代であるから、少し変った手をつかえば、彼等は容易にあざむかれる。

ことに小田原の近傍には、天狗の伝説で名高い道了山があるので、天狗にたいする信仰が深い。

「試合を望む者があれば、何びとを問わず、我が秘術の一端をしめすであろう」

菟角はそのような広言をはき、夜になると彼の居処をくらましてしまう。つまり今なお天狗の太郎坊と、一緒になっているような風を、人人に信じこませるためだ。

菟角はこうした手段で人心をつかみ、城下に町道場をたてて、一流の師範となった。法螺はふいても、腕はたしかである。彼と試合をして、うち勝つ者がない。後には北条の家臣等が、ぞくぞく入門して、菟角に師弟の礼をとるようになった。

江戸へ移った後、菟角の名声はいよいよあがった。門弟の数は四五百人におよび、その中には徳川の旗本や大名もいる。

彼は江戸城の東に道場をたて、世を我が者顔に、羽振をきかす身の上になった。破れ布子をきて竈の火をたきつけたり、竹細工に精をだしたりしていた江戸崎時分をおもうと、隔世の違いがある。

この時代剣術の師範は、数が少かった。各家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo